

南方（仏印）

大陸に行く

大分県 川野 忠 俊

私は、弟、妹計十人兄弟の長男として、大正十（一九二一）年九月一日に生を享けました。児童たちの遊びの中でも常に「男子の長だ」といって、威張っていました。こういう子だくさんの家庭です。両親は一生懸命働き、私たち兄弟を育ててくださり、今でも感謝しています。そして、兄弟は、年齢に応じて皆家業を手伝いながら、無事成人してゆきました。

家業は漁業で、「一本釣り」や海底の魚貝類を採集する素潜り漁業をしていました。近年は、機

動力を駆使して、少し遠い海まで出てゆくようになりました。

私は、学業を経て、市内の銀行、伊予銀行へ正式の行員として勤めました。昭和十二（一九三七）年、上海事変が勃発し、以来、戦火は、支那大陸では北支から中支へ拡大し、日支事変へと変貌してゆきました。そして張鼓峰事件以来、軍部が独走するようになりました。

国内では、「国民精神総動員令」が公布され、「奢侈禁止令」「東亜新秩序建設」「五族協和」「大東亜共栄圏」「民族の結集」などが唱えられ、日本がこの戦争に勝たなければ、自由と繁栄が大東亜民族の上に来ないなどと、大変な少年期に我々は育ったのです。

大学生、専門学校生なども繰り上げ卒業によって徴兵検査が実施される「学徒動員令」となりました。

私は、昭和十九年の春、徴兵検査にて「甲種合格」となり、皆からも喜ばれました。男子はすべて戦地へ、という時代でした。

同年十一月十日、歩兵第二二六連隊に現役兵として入営しましたが、その後、この部隊は歩兵第二十三連隊補充隊へと名称が変更となりました。

入営すると「近日、出動である。軍装を整え準備、待機のこと」ということになりました。

十一月二十二日早朝、「全員起床！」の号令で起こされ、軍装を整え、兵営に整列すると、指揮官から「ただ今から出陣する。郷土兵の名譽を汚さないように」との訓示があり、肅々として営門を出ました。

翌十一月二十三日、御用船にて博多港を出港、うわさに聞く玄界灘の荒波も珍しく波静かで、同日夜には朝鮮の釜山港に上陸しました。釜山より

は軍用列車で出発し、二十六日、鮮満国境の鴨緑江を通過、二十七日には満支国境の山海関を通過し、昭和十九年十二月二十二日、湖北省孝感に到着しました。ここで初年兵教育を受けることになりました。

初年兵教育の教官は、将校（中尉）一人、下士官二人教育係り助手として古年次兵によって、我々現役の初年兵三十余人が訓練されることになりました。

当時、中国は、日本軍と戦うほかに、国内においては、いわゆる国共相争う内戦が随所で行われていました。一つは蔣介石を指導者とする国民政府軍で、他方には共産党の毛沢東が率いる八路軍でした。国民政府軍は、欧米列強と称されていた米国、英国、蘭国などを後ろ盾とし、援蔣物資を送られていました。八路軍にはソ連が武器、弾薬などを援助していたのです。この二者に日本軍を交えた中国大陸は三つ巴の戦場となっていました。このため私たちの現地教育も満足な教育を受ける

ことなく、軍歴上だけ、一期の検閲終了とされたのでした。

前面の国民政府軍と背後の強烈なる八路軍、それに人民の中に隠れた便衣隊などが出没する戦場に直面している場面で、我々だけが「前へ並え」と訓練、教育しているのも現実的ではなかったのでしょうか。かくして昭和十九年も終わりました。

昭和二十年の正月は、元旦から戦況が険しくなってきました。日本軍が正月を祝日として休んでいると、八路軍が孝感の西方といわず四方から一大攻撃をしてきました。迫撃砲とチェコ機関銃を持ち、その弾着が正確な上に、当然地域の地理に明るく、これらの攻勢に日本軍は非常に難渋し、多大な犠牲が出ました。

私たち初年兵は、黙して語らずでした。そして部隊後方の警備から掃討作戦へと転換し、そして我々隊員は、迎撃要員から攻撃兵士になってゆきました。

「戦いは、殺さなければ殺されるのだ」と、来

る日も来る日も、雨の日も風の日も、休むことなく戦いは続くのです。無茶苦茶だといえ、そうですが、正常な神経や常識では通用しないのが戦争だと実感するばかり。

そして部隊は北支から中支戦線へ進軍しました。その間、晴天が三日も続いたと思えば暴風雨が来たり、砂塵を巻き上げると風に眼を閉ざして風下に向かう。雨天が三日も続けば道は泥濘と化し、股上から腰まで没する有様。こんな中を兵士たちは蟻のように黙々と歩くのです。「なぜ」「何で」という疑問も捨てながら。

敵は、これらの難渋している状況こそ好機とばかりに、我が部隊に攻撃を加えてきます。かくして友軍の惨状は眼を覆うものがあり、戦場、戦火の中のあちこちで肉片が飛び、血潮が流れ、「衛生兵！」と呼ぶ怒号が乱れる。そのような戦場で甲斐甲斐しく衛生兵は働く。

自分たち歩兵は、あくまでも歩く兵隊である。山を越え、大河を渡り、命の限り前進あるのみで

ある。闇夜を歩き回って迎えた黎明で、初めて方位を知り、敵中にあることを知る。同じ道を堂々巡りして、再び元の出発点に戻っていたりする。

我々は第三十七師団歩兵第二二六連隊第十二中队の一兵士として、南へ向かって歩くこと数千キロに達している。当時、中国に対する国際情勢は、蒋介石軍への援助物資を搬送する援蒋ルートが仏領インドシナ（ベトナム）、カンボジア、ラオス、ビルマ、そしてインドなどから延々と続いていました。この中で、蒋介石は中国の奥地の重慶にいました。

（第三十七師団は「冬」部隊で南方軍直轄の第三十八軍隷下にあり、昭和十九年二月、大陸打通作戦、京漢作戦に参加、その後、前記の第三十八軍下で北部仏印に進駐、マレー半島へ転用のため移動中に終戦を迎える。久留米編成の師団で、歩兵は第二二五連隊（熊本）、第二二六連隊（都城）、第二二七連隊（鹿児島）が所属した）

我が隊も南進を始めて以来、休むことも知らず、

攻撃、夜襲、残敵掃討と絶えず銃剣を手にしていました。

部隊は、昭和二十年五月三日、仏領インドシナの鎮南関より入国しました。五月十七日、東京州太原省太原に到着、六月八日、太原を出発、七月二十八日、泰印国境のスパイタンチヨウを通過、同月三十日、バンコックに到着しました。

その間、山を越え、大河を渡り、軍靴を幾足潰したか、数千キロの足跡であるが、これがわずかに十カ月のことであった。

歩兵とは歩く兵隊である、とは良く言ったものである。その通りに我が身が証明したことになる。

終戦の報が来た。九月二十七日、ナコンナヨク地区に集結の命令で全員武装解除となり、結末は至極簡単なものでした。収容所でも英軍の指示でのんびりと生活していました。

昭和二十一年正月三日、ノンホイに集結して、さらにバンコックに移動させられました。

昭和二十一年六月十六日、バンコック港を出帆、穏やかな航海をして、七月十日に鹿児島に上陸することができました。開聞岳を右に見て、桜島に迎えられるの帰国は感慨ひとしおでした。日本は良い国だ、そして美しい国だ、とつくづく思ったものです。

そして復員の事務処理を経て、郷里へ帰ってきました。郷里の山も川も、そして近隣の方たちも温かく迎えてくださり、有り難く感じました。

出陣前の壮丁検査の同期の友達は、約半数が戦死又は戦病死となりました。このような悲惨な戦争は二度としないで、と心に誓ったのです。

そして出征前に務めていた伊予銀行に再び奉職しました。また我が家は、多産系か兄弟は十人、皆無事成人して家庭を持ち、子供、孫たち一族は幾十人、今も平和な楽しい生活をさせていただいております。それに付けても、いつまでも戦いのない世界を念じますし、散華された聖霊に黙禱を捧げます。